

2010年度第12回物学研究会レポート

「先端__まだ、存在しないもの」

黒川雅之氏 （物学研究会代表）

坂井直樹氏 （物学研究会ディレクター）

植松豊行氏 （物学研究会ディレクター）

2011年4月12日



BUTSUGAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

2011年度の物学研究会のテーマは、「先端__まだ、存在しないもの」です。

「激変する時代の中で、我々の生活は？ 企業は？ デザインの行方は？」といった現実を直視して、まだ見えないこれからの生活や産業の未来を展望し、また時代の先端に想いを馳せて『まだ存在しないもの』を描いてみたい。昨年度のテーマ『特集と普遍』では、人間のDNAに刻まれた記憶とデザインの原理を考察してきた。本年度は、変わらないものと変わりゆくものの間を行き来しながら、『先端__まだ、存在しないもの』を探して行きたい」（黒川雅之）。

今回は、黒川さん、坂井さん、植松さんのお三方から、「先端__まだ、存在しないもの」というテーマで語っていただいたのち、トークセッションを行いました。以下、サマリーです。

「先端__まだ、存在しないもの」

黒川雅之氏 （物学研究会代表）

坂井直樹氏 （物学研究会ディレクター）

植松豊行氏 （物学研究会ディレクター）



01

はじめに

司会： 本日はおいでいただき、ありがとうございます。本来なら3月中に開催予定でしたが東日本大震災の影響等で本日に延期いたしました。2011年度の物学研究会は、テーマを「先端__まだ、存在しないもの」と設定しました。今日は、このテーマでどうプログラムを組み立ていくのか、物学研究会代表の黒川さんに加え、ディレクターの坂井さん、さらに今年度からディレクターをお引き受けいただき、元パナソニックデザイン社社長の植松さんのお三方に、それぞれのご専門や背景、ご興味などからプレゼンテーションしていただき、その後、質疑応答というかたちでトークセッションを行いたいと思います。よろしくお願いいたします。

「先端__まだ、存在しないもの」

1. 未曾有の大災害？

こんばんは。今年度から物学研究会のディレクターを引き受けましたが、今日はみなさんの代表というつもりでこの場に立っています。「先端__まだ、存在しないもの」という今年度のテーマをいただいてから、元は3月25日開催予定だったプレゼンの準備をしていたところ、3月11日に東日本大震災が発生。この未曾有の災害を前にデザインって何だ、何ができるのかと、改めて考えさせられました。大きな被害は不可避だったのか。デザインは何をしなければならなかったのか。自然の畏怖を知らされ、無力感も覚えました。発生から1カ月たった今、我が国のモノづくりは大きな課題を抱えたと実感しています。

認めなければならない真実も露呈しました。未曾有の災害といっても自然科学的見地で見ると予見不可能な範囲ではなかったのではないのでしょうか。安易に「想定外」をエクスキューズに用いることは許されないことと考えます。

さらに震災に伴って発生した原発事故は政府並びに基盤産業の危機管理能力、マネジメント力の稚拙さを世界にさらけ出しました。批判するのは簡単ですが、長年、モノづくりや些かなりともマネジメントに関わってきた一員として、この上ない無力感と同時に慙愧に堪えません。日本は戦後60年、モノづくりを通じて日本ブランドの構築を一生懸命やってきました。しかし今、日本国そのもののブランド価値が崩壊の危機に瀕しています。ブランドの再構築を含めて、「次代のあるべき価値__先端」を具現化していくことが我々に本当にできるのか、謙虚に考えたいと思っています。

この研究会には多忙のため数回しか参加できないかもしれませんが、ワークショップなども開催し、みなさんと一緒に考えたいと思っています。今日は時間が短いので、その予告編と思って聞いてください。

2. 日本を取り巻くOUT LINE

まずは日本のアウトラインについて、みなさんと共有しておきたいと思います。世界地図の標準は英国のグリニッジを中心としたものであり、日本はまさに極東、けして中心にはありません。世界の中で、国土の面積は0.25%、GNPは8%、人口と言語は1.79%、注目はインターネットの情報量、IT、ITと言われている割にたった0.6%。この数字、みなさんはどう考えますか？

◆財政基盤の危機的状況

総人口は1億2,700万人、そのうち7700万人が労働人口で、残り5,000万人が扶養家族です。エネルギーは97%、食糧は76%を輸入に頼っています。また、一般会計予算92兆円に対し、税収は41兆円で、不足分は国債等（44兆円）で補っているのが現状。こんなこと、続くわけがありません。国の借金額は過去最高の997兆円に達していますが、これは国民一人あたり785万円、GDP対比で200%です。これまでの約20年、株価の下落も著しく総評価額は全く成長していません。製造業では450万人の失業者が生まれていて、特にプロダクト系では学生3人に1人は就職先がありません。実はアメリカやドイツも同様に、世界的にデザイン系への就職は大変なようです。

◆喫緊の課題

「少子高齢化」が進み、医療・介護や年金問題はますます深刻化するでしょう。そして、今後、まちがいなく「地球温暖化」と「財政破綻」のクライシスがやってきます。こんな状況を踏まえて考えると、「先端」とはやはり、次代に在るべき新たな価値や適正の創出だろうと思います。たとえ

ば、アメリカのインダストリアル・デザイナー、レイモンド・ローウィが提唱したMAYA (Most Advanced Yet Acceptable) が示すように、受け入れられる最も進んだ価値の具現化……。つまり次代の価値のレイヤーのオープナー、それが先端ではないかと思うし、我々デザイナーは、そういう新たな価値のレイヤーを拓く、オープナーにならなければならないと思うんですね。

そして、これからの先端な価値づくりの要諦は、なんとしても日本でつくり、雇用や付加価値（限界利益額・・・GDP）が得られるモノやソリューションを開発していかなければならないと思います。先ほど示した日本のアウトラインからご理解いただけたと思いますが、われわれは座して死を待つわけにはいかないことをご理解いただきたいと思います。

3. デザインに何ができるのか

こうした現状を踏まえ、デザイナーとして「先端__まだ、存在しないもの」を考える方向性のポイントをいくつか挙げてみました。

◆「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

ビスマルクの有名な格言で、僕はいつも心に留めています。経験は有用ですが、決めつけや過信、慢心になり、素直な視点の欠如につながることもあります。自分の経験だけでなく、歴史から学ぶことが大事だと思います。新たな価値づくりに際しては、次代の価値のレイヤーを拓くこと、この真摯な姿勢が求められると思います。

◆ターゲットは2050年

CO2排出問題や人口問題を抱える世界は2009年7月、ラクイラ会議で歴史的に重要な合意に達しました。2050年までに温室効果ガスの排出量を80%に削減すると決めたのです。数十年先の世界のあり方が環境重視決められたわけで、この先40年、世界のフレームワークは環境技術やサステナビリティへと向かうことになります。この変化はチャンスだと思います。過去数十年、日本が停滞したのは情報化社会への変化の中でヘゲモニーが取れなかったから。だから今度は、我々がぜひリーダーシップをとりたいと思いますね。

◆デザイナーに対する辛辣な批判

山本良一先生は「日本をこんなに汚し、無秩序にしたのは君たちデザイナーとアーキテクトの責任だ」と言い、D・ラムス氏は「君たちは、日本のデザイナーたちは漫然と、視覚的汚染物質を生みだし且つ放置している」と指摘されています。また、アレックス・カー氏は著書『犬と鬼～知られざる日本の肖像』の中で、「日本にはこんなに美しいモノや価値が存在しているのに、それをなぜ認識しないのか」と指摘しています。

地球環境保全に関しては、極めて残念ながら復活できるティッピングポイントは既に過ぎてしまいましたが、解決策は在ると伺っています。そのひとつが、「Ecologically Sustainable Economical Growth」というテーマだと思います。人と環境に配慮しながら、発展調和する新たな「もの」や「社会システム」づくりへの変革を図るということ。我々ができることはこれらの思いと方策を“見える化”し、提示することだと思います。

◆180° デザイン⇒360° デザイン

「売り逃げデザイン」といわれる180° デザインでなく、これからは次代の価値観を先取りして反映した新たな適正なデザインである360° のデザインを目指しましょう。ウィリアム・マクドナーはこれからのモノづくりのコンセプトを「ゆりかごからゆりかごへ」という言葉で表しています。つまり、二次利用できる素材や再生可能な製品など、いわゆる真にサステナブルなモノづくりから生まれる価値、そして魅力ということです。

◆モノ⇒コト+モノへ

もう一つ言いたいことは、これからは「モノでなく、コト・・・“物語り“を売る」・・・このことが先端創造の要と考えます。ただ単にモノをつくるのではなく、次代を拓くあるべき適正なシナリオの作成と具現化。

環境とかアトモスフィア、サービスとかを描き形にすることですね。たとえば、スティーブ・ジョブズのモノづくりのコアはモノの提示ではなく、行為や役立ち・・・ホスピタリティーの具現化と思えます。つまり携帯電話をデザインするのではなく「コミュニケーション」という人と人との思いを繋ぐこと・・・この価値のリソースを如何に活用して具現化させるかを問いかけているように思います。だから、多くの人が彼の生き様やモノづくり、デザインにひかれるのだと思います。

次にくるコミュニケーションツールって何でしょう？ どうなったらよいのでしょうか？ 今年、こんなことをみなさんと考えたいと思っています。ということで、新しい価値の息吹を感じていただけたでしょうか。なんとしても、我々の世代で次のレイヤーを拓くことを成し遂げ、日本“発”“初”のモノづくりに繋げ、再生の一助に貢献できればと考えています。以上です。

プレゼンテーション：坂井直樹氏（物学研究会ディレクター）

「40 for the Next 40： 先端__まだ、存在しないもの～Post-modernから、Ultra-modern（先端）へ」

今日は昨年末、未来学者トフラーが発表した「40 for the Next 40 （今後の40年を左右する40の変化）」をベースに、1日10時間もインターネットに張り付くほど「情報中毒」の僕が最近、「先端」という意味で「Ultra-modern」をキーワードに大事な、面白いなと感じたものを紹介しながら、いろいろ考えてみたいと思います。よろしくお願いします。

1. 黒川雅之氏の「先端思想」

まずは、黒川代表がまとめた「先端思想」について確認しておきましょう。

「現実を直視してまだ見えないこれからの生活や産業の未来を描いてみたい。これからの時代の先端に想いを馳せて「まだ存在しないもの」を描いてみたい。どんなテクノロジーとプロダクトが現れるだろう？ その先にどんな生活があるのだろう？そして、デザインはどう変わるのだろう？ どんな商品をつくり出して行くのだろう？ デザインを決めるものは何になるのだろう？」

こんな視点も踏まえて考えてみますが、その前にまず、今回の震災について『New York Times』に掲載された水木しげるさんのイラストを見てください。津波にのまれた人の右手だけが水中から突き出された刺激的なイラストですが、彼は太平洋戦争で左手を失っています。そういう意味で僕は、この姿は彼自身でもあり、今回の震災被害者と心を共振させているように感じました。

もう一つはアメリカの電動三輪車アプテラ『e2』です。すでに製品化されているので「先端」とは違うかもしれませんが、最近の日本に「劣化」や「老化」などを感じている僕にはアメリカの楽天主義とか快活さが感じられ、心惹かれる製品です。

中国も元気ですね。たとえば、今つきあっている上海の自動車部品会社はたった400億の売上ですが、利益は100億。38歳のCEOのもと、従業員1800人の平均年齢は26歳と非常に元気。中国全体も今、バブル状態にあるので若い人が走りまわり、無限に成長していきそうな感じがします。できれば上海にいる時間をもっと増やしたいと思うくらいです。

2. トフラーの「40 for the Next 40」から

ここからは、トフラーの「40 for the Next 40」の中から、僕が面白いと思った主なものを紹介していきます。

◆政治分野の先端

「米国やEU中心から、ブラジルや中国、インドの経済が強まり、国家パワーが多極化していく」という点。特に注目は、「非政府的存在のパワーが高まり、国家のパワーや影響力により広く挑戦するようになる」「Facebookなどを使ってプライベートセクターやNGO、宗教グループ、国家を上回るリソースを持つことで非常に大きな力を与えられた個人（hyper-empowered individuals）などが行動を起こすだろう」という指摘です。

「非政府的存在」とは悪い意味でなく、本来政府がやるべきことを国の力に頼らず個人がやるという意味。たとえば、ビル・ゲイツさんの世界的な影響力は大きいですが、いわゆる社会貢献資本家（Philanthro-Capitalists）などもそうです。たとえば、2001年に英国で生まれたファンドレージングツール「Just Giving」。また、日本でも、30代の佐藤大吾さんが代表で立ち上げた「Charity Platform」は、今回の震災から数週間で5億円を集めています。

こうした社会貢献資本家は今、とても注目されていて、日本の学生にも人気が高いビジネスです。今の若い人たちは殊勝で倫理的で「世のため人のため」と本気で思っている人がけっこう大勢いるんです。

◆経済・ビジネス分野の先端

面白いと思ったのは「OBSOLETAGE（無用知識）」。Obsolute（役に立たない）とKnowledge（知識）からの造語で役に立たない知識と言う意味ですが、「すべての知識には寿命があり、ある時点で無用になる。しかも無用になる速度はどんどん加速する」という点。さらに「知識を新たなものに保つためのコストは上昇し、意思決定に影響を与える」という部分は、僕は完全には理解してはいけけれど、気になります。

◆テクノロジーの分野

テクノロジーはやはり中心で、この後にもいろいろ出てきますが、僕は特に「企業は、『コネクター』となることによって、その価値を高めていく」という点に面白さを感じました。コネクターとは、資本家や従業員といった従来の株主だけでない人たちのこと。たとえば、アップルはConsumer-generated Companyだと僕は感じていて、つまり誰も頼まないのに興味深いアプリをどんどん市場に出していくことで熱狂的なファンがブランドの価値を勝手に高めてくれます。そうしたファンを生み出す会社をコネクターというのだと思います。

◆環境の分野

今回の原発事故などもあり、僕が「第4の産業革命」と呼ぶ、EVとスマートシティを巡る電気エネルギーに注目しています。これをきっかけに紛争が起きたり、企業の隆盛も問われるようになるでしょう。

◆新興国の分野

新興国としてアジアやアフリカが台頭する一方でどこかが衰退するかもしれないし、あるいは世界全体が繁栄するかもしれない。まだ誰にもわかりませんが。たとえば中国は、通貨ではブラジルやインドと組みながら、エネルギーや原材料ではベネズエラやアフリカと組むなどグローバルなダイバシティを進めています。革命後に世界に飛び出した優秀な人材が今、国内に戻ってきているし、やはり注目ですね。

それから「急速な都市化と世界規模の人口移動によってメガ都市が生まれる」という指摘も面白い。たとえば中国では、珠江デルタ地区の9都市を合併し世界最大のメガ都市をつくる計画があり、完成すればロンドン26個分に相当するそうです。メガ都市のメリットはコストが安い点ですね。

◆SNSの分野

とにかくSNSのFacebookが注目です。検索エンジンのグーグルも情報インフラとして普及していますが、グーグルが集めるのは世界中のデータ。一方、Facebookの対象は人間です。将来的にはFacebookのほうが有利でしょう。人間の繋がりの方が強いですからね。10年後にはガスや水道などと同じインフラになりそうな気がします。

◆EV+マテリアルの分野

2010年のロサンゼルス・オートショーで行われたデザインコンペで面白かったのが、日産の「IV」。今年は「軽量性」がテーマで、車体は1000ポンド（454キロ）まで、人員を載せて1500ポンド（680キロ）までという条件付きだったので、「IV」の車体はツタと蜘蛛の糸を素材にしたパイオポリマー・フレーム製でした。

◆エネルギーの分野

今回の事故もあり、原発は徐々に廃止されるでしょう。すると、もっと効率的なエネルギーの獲得が必要になってくる。風力や地熱のほうがもっと効率がいいという意見もあるようだし、大阪などが産業振興としてソーラーを導入しているように、Political Economyとして選ばれる可能性もありますね。

◆コミュニケーションの分野

「Google Transfer for Android」は翻訳用アプリの新版で、携帯電話を汎用通訳機のようにできる機能「Conversation Mode」を追加したものです。端末に話しかけると音声認識して任意の言語に翻訳し、ロボット音声で読み上げてくれます。数カ月前に行われたデモの様子を見ると、精度もかなり高く、夢のような技術だと感じます。

◆ガラス+ディスプレイ技術の分野

我々は今、多くのガラスに取り巻かれています。電気さえあれば、ガラスはソーラーにも液晶ディスプレイ（LCD）にもなる。背面がソーラーで表面がLCDなら、自分で発電して使うことも可能ですね。スマートフォンなど液晶に指でタッチする仕組みのユーザーインターフェイス(UI)が今の主流。しかし、これからはハードウェアに依存しないUIが登場するでしょう。これからはデザインがもう少し理系的になっていく時代かもしれません。以上です。

プレゼンテーション：黒川雅之氏（物学会代表）

「先端__存在しないもの」

1.はじめに

存在しないものをどうとらえていくかはとても難しいですが、イメージとしては音速を超えた物体です。事前に今から来るとは分からず、通り過ぎてからやっと認識する。先端とはそんな状態ではないか。あるいは、生物学でいう、Mutation（突然変異）のようなものが起こるかもしれない。そんな直感がしています。

過去の事例を拾ってみました。たとえば、「コンピュータ」。登場の前後で生活は一変し、使いだしてから、筆記具や辞書、世界時計や通信装置、オーディオや計算機など、いろんなものが要らなくなりました。

他にも、iPhoneの登場で手紙や電話やカメラ、目覚まし時計などが不要になり、「デジカメ」は

コンピュータと組み合わせると、現像所からプリントショップ、写真帳や送信する仕掛けまですべてを含みます。「GPS」はとんでもない装置。膨大な世界地図が不要になり、データの保管庫や旅のガイドブックにもなります。FacebookやTwitter、クラウドなども今まではなかった情報システムです。こんな風に、過去には存在しなかったものが存在するようになったわけです。

時代の変遷でみれば、1920年頃からがマシンの時代、1950年頃からはエレクトロニクス、そして1990年頃からデジタルの時代に入っています。デジタルという概念が登場したことで都市や生活、考え方で大きく影響されましたが、登場した年代を調べて行くと、ほんの15年以内の出来事です。携帯電話が普及し始めたのもインターネットの民用化も17年前。Googleのスタートは1998年、GPSの一般開放は2000年、Facebookは2004年からです。

デジタルによって社会はまだこれからも激変するでしょう。実際、リビア、エジプトなどアジア・イスラム圏で最近、政変が起きましたが、今後の先触れではないかと感じています。

2. デジタル革命時代の2つの変化

「デジタル革命」の時代を迎えたことで、今、2つの大きな変化が起こっています。1つは、「民主化、近代化による中間層（市民）の増加と総人口の増加」です。この変化は今、途上国や新興国で始まっています。背景には情報の発達によって知識が増すことでもっと豊かになりたいという成長への意欲が低所得者に生まれたことがあります。言い換えれば、不満が意欲になっていて、ギャップの大きさが社会を動かす力になるのです。

さらに、GDPが増えれば人口も増えるので総人口の爆発も起こります。1900年から2000年で10億人増えた世界の人口は、計算では2000年から2050年の間では30億人増える。医療の進化によって子どもの死亡が減るのも一因です。

今はまだ、ほんの一部の先進国が地球の富を独占し、途上国の人たちに支えられている状態ですが、おそらく10数年以内にはどの地域でも中間層が激増しているはずです。

2つ目の変化は、「都市人口が爆発的に増加し、超都市が生まれる」ことです。人口、あるいは中産階級が増えると、都市の集中化が起こります。今後40年間で地方の人口は減り、都市にはどんどん増え、総人口の70%が集中する見込みです。交通渋滞なども問題となるでしょう。

ところが、成長が止まるときはどこかでやってきます。そういう瞬間をカタストロフィーといいますが、そのとき、一種のMutationという大事変が起こる可能性があるのです。人間の人生は底知れぬ不安とともに始まりますが、次第に夢を抱き、頑張る。そして満足すればさらにもっと上を目指し、行きすぎてしまうこともあるでしょう。でも地球には限りがあるので問題が起こり、破綻が起こる。といっても、それは破壊ではなく、いわゆる生命的な飛躍。落胆によって意欲がわき、再出発することです。

まとめると、デジタル革命によって新興国の爆発的な人口増加が起こり、同時に膨大な中間層が登場する。すると、グローバル化する世界に多様な文化が共存する時代が訪れ、激しい都市集中が起こる。都市の構造自体も変化を余儀なくされ、ある種の突然変異が起こらざるを得なくなり、これをHyper Architecture、Hyper city、Hyper Villageと呼ぶのだらうと思います。

ではメディアが発達するとき、社会にはどのような変化が起こるのでしょうか。昔は国や都市など小さな地域社会の中が主な活動範囲でしたが、次第に多重化され、枝や葉のあるツリー構造になりました。そして今は、ネットワーク構造に変わり、Facebookなどを通して直接関係がない人ともつながっている状態です。

昔の社会は家族単位が中心で、帰属というのは拘束でもあるけれど、言い換えれば安心な構造でした。ところがネットワーク社会では自由だけれど、孤独でもあり不安です。社会構造の変化は人の心にまで影響していくんですね。

そのため、ネットワーク時代になると、考えなければならぬことがいろいろ出てきます。たとえばインフラも、都市が巨大化することによって、逆に一都市の中で自給自足的にならざるを得ないと思われます。その象徴が蟻塚。この中で食料もつくるし、エネルギーも生産する。そんな都市の姿が目に見えます。

また、途上国でのCO2排出量が急増していることもあり、このままいけば地球はどうしようもなく

汚れてしまうはずで、それに水などの資源も枯渇し、成長国では食糧不足も起こる。人口が増えてもその構成は先細りで、労働人口は激減する。一方、自殺者が成熟国ほど増えていく。そしてまた、カタストロフィーが起きるかもしれません。今、僕たちが考えている「先端」というのは、こんな時代に重なっていくのだと思います。

3. これから起こるだろう6つの変化

今後の変化として考えられることを6つ挙げてみました。1つ目は「世界がネットワークの時代に入る」こと。2つ目が「情報革命が世界をグローバル&パーソナルにする」。グローバルはパーソナルを必ず伴うもので、グローバルのキーワードは世界同時、全体一律、自己解放、直接参加、自由平等であり、その裏側にパーソナル面としての自主自律や地産地消、自給自足や自己防衛、自己責任といった発想が同時進行します。だから世界がグローバル化すると寂しい人間像が見えてくるんですね。

3つ目が「人口と中間層の爆発的増大と多様な民族と文化の共存する時代」。日本人には日本語しか話せない人間がいる。どうするんだという問題がありますね。4つ目が「Hyper Architecture、Hyper City、Hyper Villageが登場する」。立体とも超高層とも限りません。フラットかもしれないし、見えない都市かもしれません。一つのエリアに限定されず、巨大な都市がとんでもない状態で我々の前に登場するのかもしれません。

5つ目が「変わらない人間（懲りない人間）と限りある地球への配慮が必要になる」。たとえば自然災害で壊されてもまたつくり直すというふうに、人間は懲りないものだけれど、限りある地球号に私たちは今、定員を超えて住んでいることを認識しておかねばなりません。

6つ目は「西洋的自然観から東洋的自然観に回帰する」。今回の地震や津波をみても、僕たちが加工して自然の力を防御するのでなく、僕も自然の一部であり、自然と一緒に生を受け、死んで行くという東洋的な思想をもう一回取り戻さねばならないという気がしています。

以上、デジタルという発想から考えてみましたが、今年度の物学研究会は科学技術の進化がどう社会を、デザインを変えるかというところに焦点を当てて考えていこうとしています。イメージはハチの巣のような超都市で、パーソナルなインフラやエコな移動システムが敷かれ、職住接近で食料工場なども近接、デジタルによるネットワークも広がる社会。そんな絵を描いてみました。今日の話はこれでおしまいにします。

トークセッション

司会： ありがとうございます。ではトークセッションに移りますが、今日のお三方の話をセッションによって一つに集約するのは不可能だろうと思いますので、会場の方の質問やご意見を伺いながら、それに答えるという形のセッションを行いたいと思います。実は、3月25日に開催予定で、事前にテーマや内容を打合せたのですが、3月11日を経て内容が変わっていらっしまったので、私は少し戸惑いました。でも、お三方の底流にある視点はとても近いものであるように感じました。では、ご質問などをお願いいたします。

Q1：

「デザイナーがやるべきことは見える化」というお話に考えさせられました。いったい我々は実用的な視点を持ち、実用的なデザインをしているのか。もう一度、立ち返って考えてみたいなと感じました。

植松氏： そういう意味でも、講演会だけでなく、ワークショップができないかと考えています。ここにいる多くのみなさんはインハウスだと思いますが、所属を超えて共通の勉強の場をもち、人間のタスクから一つの行為を考えてみたいですね。

黒川氏： 今回のレジュメを準備するのに、すごく時間がかかりました。完成しても、また考えて作り直す。いろんなことに気づく、よいチャンスになりました。「見える化」はとてもいい言葉だと思います。これからのデザインを象徴する言葉として、売ることを含み、使うことを含み、そこに存在することも含む。さらには、ものが働くことやお金を稼いでくることも含むのだろうと。今回のテーマ「先端_存在しないもの」は、まだ見えないものを考えることによって、将来の進むべき方向を探し、一歩を踏み出す。歩くのは一歩なんだけど、見つめるのはもっと先でなければなりません。

Q2:

見えていないものを見えるようにすることがデザインの力だと思ひ、そこで大事なのは想像し、想いやり、物語を作ること。でも、使い手に解釈してもらう部分を残すのもデザイナーの役割ではないのか、いったい作り手はどこまで完成品を作るべきなのか、そんなことも思いながら聞いていました。

黒川氏： 見えないものを「見える化する」というよりも、なんだか神様とか事業家みたいになりますが、むしろ、「存在化させる」という言い方をしたほうが、それくらいの気持ちのほうがいいかもしれませんね。

坂井氏： たしかにそうですね。ちょっと参考までに紹介すると、さきほど話した佐藤大吾さんの「Charity Platform」がウェブで集めた寄付金額は現時点で11億5千万に達しています。彼は800億円ほどもあるイギリスの寄付市場を目の当たりにし、「これは日本にも必要だ」と今まで日本にはなかった寄付市場をつくろうと10年後を見据えて始めた。そして、小さなことの積み重ねが今、11億円を超えたわけです。従来は存在しなかったものをつくることは魅力的ですね。

まとめ

黒川氏： 今日のプレゼンで、今後1年の方針を示し得たかは分かりません。ただ、「先端__まだ見えないもの」というテーマで、「10年後を描けたら」と思っています。おそらく暗中模索しながら進む1年になるかと思っています。私たちがセッティングするだけでなく、みなさんの意見を反映することで方向が見えていくと思いますので、セミナーやセッションの企画や、現場へ行こうと言う話も出ています。みなさんの発言を大いに期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。

司会： 今日のお三方の話を底流にして、物学研究会のテーマも今後、「見える化」していけたらと思います。今日はありがとうございました。
以上

2010年度第12回物学研究会レポート

「先端__まだ、存在しないもの」

黒川雅之氏 (物学研究会代表)

坂井直樹氏 (物学研究会ディレクター)

植松豊行氏 (物学研究会ディレクター)

写真・図版提供

01；物学研究会

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。

(C)Copyright 1998~2011 BUTSUGAKU Research Institute.